

神奈川県漢詩連盟九詩期会

江南漢詩の旅二〇一七



はじめに

古田光子

今回の神奈川県漢詩連盟九詩期会の 江南漢詩の旅は、大変ユニークなもので、みのり多いものとなりました。それだけに企画をしてくださった方々は大変でいらしたでしょうが、特に団長の山口さんの、準備から事後処理までの実に綿密な仕事ぶりには。感謝！感謝！です。

蘇州大学呉雨平教授の講演、寒山寺詩碑前の吟詠等、漢詩ツアーにふさわしい行事がありました。が、特に心に残ったのは。蘇州・滄浪亭での滄浪詩社の方々との交流会です。

中日両国の人々が互いに詩を吟じ、筆を揮われるなど、同じ文化を共有していることを痛感させられました。そしてこういう伝統文化が両国に引き継がれていきますように、こういう交流が更に盛んになり、両国の友好関係が深まりますように祈ります。

滄浪亭中日詩社交流会

姑蘇訪到度秋風

姑蘇こそ 訪ね到れば秋風度る

古雅江亭和氣充

古雅の江亭 和氣充ちたり

中日騷人親睦會

中日の騷人 親睦ふるの會

吟詩揮筆興無窮

詩を吟じ筆を揮ふるいて興窮り無し



目次

口絵	記念写真（交流会・講演会・霊隠寺・浙江博物館）	3
はじめに	古田光子	5
□ 神奈川県漢詩連盟九詩期会江南漢詩ツアー実施報告		10
□ 参加者名簿		11
旅のはじまり	山口幸雄	13
今回旅行の感想など	宇野次郎	16
杭州旅遊	埴原かをり	17
江南旅行の楽しみ	中野雅利男	21
滄浪詩社との交流会	牛山知彦	28
□ 滄浪詩社について		34
□ 蘇州大学呉雨平教授について		35
九詩期会江南漢詩ツアーに寄せて	平賀康雄	40
江南漢詩ツアーに参加して	長岡巨知・容子	43
漢詩のふるさと江南地方を訪ねて	松本祐輔	53
九詩期会江南漢詩ツアーに参加して	松本清子	57
江南の旅の感想	武田一郎	59
江南の旅―団長亭日乗	山口幸雄	76
トリップフォトアルバム・㊄ 江南	長岡容子	85
おわりに	住田笛雄	85

神奈川県漢詩連盟九詩期会江南漢詩ツアー実施報告

初めての試みでしたが、日中協会のご後援と、企画及び現地との交渉にあたっていただいた(株)メディア新日中(MJC)のご尽力により、交流会・講演会・旅行それぞれ成功裡に終了することができました。また神奈川県漢詩連盟からは先方へのお土産を提供いただくなど、関係の方々に多大なご協力をいただきました。深く感謝いたします。

1 趣旨 中国江南地方の風景文物に触れ、現地の漢詩愛好者や研究者と交流することで、漢詩に対する理解を深めるとともに、日中の文化交流に寄与する。

2 後援 一般社団法人 日中協会

3 経費 参加者一人 十三万円(二人一室。一人一室希望者は二万円を加算)

4 参加者 住田先生、古田先生、好文会・埴原、八起会・長岡夫妻、十期会・中野、九詩期会・牛山、宇野、武田、平賀、松本夫妻、山口 計一三人

5 日程 二〇一七年一〇月二五日～三〇日、五泊六日(当初予定は二九日、四泊五日)

第1日 一〇月二五日(水) 八・四五 羽田発MU五七六便↓上海浦東空港へ一〇・四〇着

上海豫園で小籠包、魯迅紀念館、田子坊へ上海泊 錦江飯店へ

第2日 一〇月二六日(木) 専用バス(三十九人乗り)で杭州へ。

靈隱寺、浙江省博物館、西泠印社、河坊街（先生交番で休憩）〈杭州泊 浙江梅地亞賓館^{メディア}〉

第3日 一〇月二七日（金） バスで蘇州へ

○滄浪詩社蘇州市詩詞協会と交流会、昼食

○蘇州大学呉雨平教授講演会

李公堤「得月樓」にて上海蟹（篆刻家汪鳴峰氏同席）〈蘇州泊 パンパシフィック蘇州〉

第4日 一〇月二八日（土） バスで烏鎮へ（住田先生は所用によりこの日帰国）

烏鎮雅園（老人施設）見学、烏鎮（水郷）、寒山寺詩碑前で吟詠、昆劇ほかの民俗芸能鑑賞

〈蘇州泊 パンパシフィック蘇州〉

第5日 一〇月二九日（日） 蘇州博物館、蘇州刺繡研究所 ↓バスで上海へ

上海浦東空港一七四五発予定便が台風二二号で欠航 へ上海浦東泊 藍舎快捷酒店（旅行保険

適用請求中）

第6日 一〇月三〇日（月） 七三〇発MU五七五A便一時間遅れにて羽田到着

6 交流会

蘇州滄浪亭にて滄浪詩社蘇州詩詞協会と交流会 通訳：MJC焦社長 （以下敬称略）

挨拶・紹介 滄浪詩社 周秦社長（昆劇の研究家蘇州大学教授）

神奈川県漢詩連盟 住田相談役・全漢連、神漢連紹介

山口：九詩期会紹介、日本人と漢詩について

朗詠・書などの披露

1 魏嘉瓚（元詩社社長、著名な朗詠大家） 中野・蘇東坡 前赤壁の賦」感想、

2 朱九如（蘇州中学校先生） 中国側に朗読依頼↓朗読

3 呂守経（滄浪詩社会員） 住田：詩吟

4 馬小萍（滄浪詩社副社長 女）

5 周 秦（前掲）

書：書道家（書道披露）王淵清

書：牛山

画：画家（水墨画）顧逸

補佐：丁鳳萍（詩社秘書長、副社長、女）

・朗詠は音楽的、みなさん美声で素晴らしい。（一部録音）。楽しくなごやかな雰囲気のうちを終了。

・滄浪亭近くの蘇州料理店にて合同で昼食。

・暖かく迎えていただいた滄浪詩社の皆さんにはただ感謝あるのみです。

・滄浪詩社の皆さんも、来てくれて楽しかったとおっしゃっていたそうです。有意義でした。

7 講演会 （蘇州大学伝統文化課堂内の教室にて。通訳：MJC焦社長）

蘇州大学文學院 吳雨平教授 「同化と異化―日本漢詩と中国古典詩歌伝統」

（概要）日本人は中国の漢詩を受け入れて、一方では同化したが、他方では日本的なものを取り入れて異化した。日本は外来文化を表面的には拒まない。しかし選択的に受け入れる。バランスが良い。

「摂取醇化」―作者も読者も日本人だから日本人に見合うものになっていく。中国では「志(陳述心志)」を表すが、日本では「心」を表す。内面的な「あわれ、わび、さび」が日本の漢詩にあらわれる。

「和習」Ⅱ「和臭」にはミスの和臭とわざと作った和臭がある。菅原道真は「晚秋二十首山寺」であえて韻を踏まなかった。和魂漢才的主張である。石川丈山の「富士山」は和臭の代表。日本人の心を書いた詩で中国人の感性にはない。中国のまねの和臭から、和漢を配合して発展させた内容になり、中国の漢詩とは違う漢詩になっている。

(教授は高度に完成した「和臭」に好意的。「万葉集」や「懷風藻」の研究あり。文武天皇や空海にも言及。教授の著書「橘与枳」↑南橘北枳。これも有意義でした。録音できなかったのは不覚。)

(住田先生は講演後、教室で新作の詩を発表され、好評でした。)

8 反省

- ・交流の形式はでき、成功だったが、質疑応答や対話の時間が少なく内容は今ひとつであった。ただし時間があっても中国語ができる人が少ないと交流は深まらない。複数の通訳の準備が必要。
- ・交流会・講演会とも初めての試みでぶっつけ本番であったため、記録担当などの役割分担ができておらず、きちんとした記録を残すことができなかった。ビデオ撮影など事前に準備しておくべきであった。

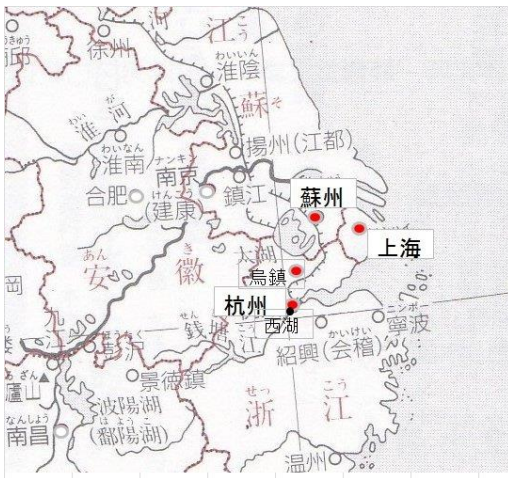
・住田・古田両先生に参加いただいたことで、当方の格を保つことができてよかった。
・観光については、中国の交通事情から観光地でのバスの乗降ができず、どこも遠くの駐車場から歩くことを余儀なくされた。山口の万歩計五日間の平均一五、二四六歩。両先生にご苦勞をかけてしまった。

・烏鎮雅園の老人大学はカルチャー教室のようなものだった。交流対象としては「詩社」が望ましい。
・このツアーの原動力であつた梅村さんが、家庭の事情で参加されなかつたのは真に残念だった。

9 今後について

・滄浪詩社は、また機会があればとおっしゃっていた。神漢蓮から、あるいは他サークルから交流の希望があれば繋げられる。中国の他の都市の詩社なども検討は可能。
・次回を検討の場合は、今回の交流会をモデルとして、よりよいものを考慮されたい。

・もし滄浪詩社の方が訪日されることがあつたら、歓待したいので皆さんのご協力をお願いします。



□ 参加者名簿

所属	氏名(敬称略)
神漢連相談役	住田 笛雄
神漢連理事	古田 光子
好文会	埴原 かをり
八起会	長岡 巨知
〃	長岡 容子
十期会	中野 雅利男
九詩期会	牛山 知彦
〃	宇野 次郎
〃	武田 一郎
〃	平賀 康雄
〃	松本 祐輔
〃	松本 清子
〃	山口 幸雄
	計 13人

旅のはじまり

山口 幸雄

九詩期会の例会のあとの飲み会の席上。今年は鎌倉あたりで吟行会をやるという話から、いっそ梅村さんに上海を案内してもらおうという話が出た。梅村さんは日中協会の諮問委員をされていて中国には詳しい。上海にはしょっちゅう行っている。

会のメンバーで行くなら漢詩に関するツアーはどうか。「江南の春」の風景や寒山寺を見に行こうと「江南漢詩ツアー」のアイデアが誕生した。

さらに、わたしには中国ではどんな人たちが漢詩を愛好しているのか、漢詩はどんな位置にあるのか、という興味があつたので、できれば現地の漢詩愛好者との交流会をやろうと提案した。

しかし中国の漢詩愛好者とうとうやつてコンタクトをとるか？ 九詩期会にはとてもそんな力はないが、現地の人たちと李白が好きだ、杜甫がいいという話ができればそれは立派な日中文化交流である。日中協会に力を貸していただけないか？ と話は進んだ。

そのためにまず九詩期会の公式行事にしようという例会で提案すると「日中交流といつて堅苦しいのはいやだ」という意見や「政治的に利用されないか」という疑念も出た。「堅苦しいことはしない」

「日中協会は日中友好協会とは別団体」「政治的なことには関わらない」と説明し、了承を得た。神奈川県漢詩連盟の公認ももらつて、日中協会の後援をいただくことになった。そして梅村さんから(株)メディア新日中を紹介してもらい、ツアーの企画及び現地との交渉にあたってもらった。

同社の焦社長にはご苦労をかけた。まず現地の漢詩愛好者を探し出してもらわなければならない。蘇州市役所に愛好者団体の紹介を依頼するところから始めたそうだ。それが老人大学に漢詩の教室があるとか、民間の詩社があるという話に結びついていった。しかしなかなか話が固まらない。まだかと催促したら、焦社長に「中国では二週間くらい前になるまで話が決まらないですよ」と言われたこともあった。経費の面でも無理をきいてもらった。

最終的に、滄浪詩社との交流会と蘇州大学の呉雨平教授の日本人の漢詩に関する講演会を成功裡に実施することができた。漢詩のふるさとを尋ねるツアーは他にもあるだろうけれど、今回のツアーは、交流会と講演会のあるオリジナルなツアーになった。梅村さんと焦社長のおかげである。

できあがったメディア新日中の「旅のしおり」の名簿には、わたしの

名前に「団長」の肩書きがついていた。いつのまにかわれわれは「訪中国」になつていたようだ。「世話人代表」と言っても向こうでは通じないのかもしれない。まあ言い出した責任者ではあるのでやむをえない。

わたしの紀行文のタイトルは「団長亭日乗」とか「団長の思い」とでもすることにしよう。



今回旅行の感想など

宇野次郎

一・九詩期会の梅村さんの人脈、日中協会の協力があつて 大変 楽しい旅行が出来た。
一般のツアーでは お土産屋に立ち寄る付き合が多いが 今回は 特別メニューのため その煩わしさがなかった。時間が有効に使えた。

二・第三日目の「日中の漢詩交流会」は 有意義であつた。漢詩の母国である 中国の人々と漢詩の詩吟の交換、書道の揮毫の交流、蘇州大学での漢詩の講義の聴講など なかなか経験ができない体験であつた。

漢詩で有名な 杭州の西湖 特に 白堤、蘇堤 並びに 蘇州の太湖 に行く機会がなかったのが残念だつた。

三・十三人という少人数がよかった。バス(中型、三十九人乗れる)が 半分ほど空いており 余裕があつた。食事が テーブルで出来 参加者全員の交流が よくできた。

少人数であつたので 観光地の混雑の中の観光が スムース に出来た。



四・観光地は 中国人のグループが多く 混雑していた。観光地の案内の地図、パンフレットが不十分であり 十分 観光できなかった。

人の混雑ぶりの割には スリなどの被害がなさそうで 治安は 良いようであった。

五・高速道路は米国並みであり 高速鉄道(新幹線)は 日本並であった。

道路の掃除、街路樹の手入れも 良かった。日本と遜色がなかった。

高層マンションが林立していた。その発展ぶりにも 感心した。しかし 建設中のものが多く 本当に住民が住んでおるのか どうか 知りたいと思った。

六・中国は 「警察国家」だと思った。交差点には 数人の交通整理人がいて笛を吹いて 交通整理していた。また 駐車停車が 極度に厳しく 観

光するには目的地からかなり離れたところの駐車場に停車するので 不便であった。

道路は 日本に比べて 格段に広いが それでも道路の割には 四輪・二輪の車の数が 多かった。

中国の人の 人に譲らない国民性からして ある程度の厳しい規則の順守の要求は やむをえないところかも知れない。



今回は 漢詩の仲間のツアーであり 漢詩を作るのが 宿題である。
試作を ご披露することにした。

上海魯迅記念館

上海魯迅記念館

七葉樹稠秋色胖

七葉樹稠く 秋色胖なり

扶桑留學幾辛酸

扶桑への留学 幾辛酸

魯求首在立人志

魯は求む 首在立人の志

塵滿乾坤夢易殘

塵滿の乾坤 夢残れ易し



○七葉樹 — マロニエ（上海には街路樹として多い）

○魯 — 魯迅 ○「首在立人」 — 一人の人として自立することが
最初である。（魯迅が中国の人々に望んだこと）

杭州旅遊

埵原かをり

杭州旅遊

杭州旅遊

西湖波静一滔滔

西湖波静かにして一えに滔々
ひと

楊柳暗垂拂鬢毛

楊柳暗く垂れて鬢毛を払う
びんもう

浚底為山唐代堰

底を浚い山を為す唐代の堰
せき

連行不見白堤高

連行して見ず白堤の高きを

久しぶりの中国でした。個人で行く貧乏旅行に染まっている私には、リッチな旅行で驚きました。言い尽くされていますが、中国の変化にも驚きです。高層マンションの林立、高速道路、観光地の整備、と。表面しか見ていないので、庶民の生活はどうなっているのか？ 知りたくてムズムズしてきます。

次は一、二か所だけに十日くらい滞在する、私にとつての贅沢旅行を実現したいものです。終日桂林の雲の流れを見るとか、なんぞチビチビしながら街行く人を観察するとか。

山口団長を始め先生方ほか、個性的なメンバーぞろいの九詩期会のツアーに参加させていただきありがとうございました。お世話になりました。



江南旅行の楽しみ

中野雅利男 まきお

旅の楽しみは無限にある。そして各自各様である。「蘇軾伝」で著名な林語堂(Lin Yutang)の少々穿った意見によれば、「旅の真の動機は世を避け人から遁れることでなければならぬ。も少し詩的に云うと日常を忘れるための旅といってもよからう」というのがある。そうかも知れないが、そうでないかも知れない。会社生活にどっぷり浸かっていた頃ならまさしく至言だっただろう。

一般的に云って、西欧の旅なら、異国の歴史・風土・文明・文化に身を委ねながら、街や田園の景観を楽しみつつ、教会・市庁舎等の建築物を仰見し、土地のレストランでグルメを味わい、美術館で豊富な絵画コレクションを鑑賞し、あるいは華麗なオペラ・コンサートに向かい、またブランド・ブティックで眼を楽しませるような逸楽に満ちている。更に、そこには、眼に見えない形での詩や文学が一層深い感動を齎すための強力な誘因であるのは間違いない。パリでヴェルレーヌやアポリネールの詩が、あるいはシャンソンが、通常の観光から一段高い境地に連れて行って呉れる。しかし、フランス語を解さない者にとってはかかる詩のトポスを十分にエンジョイすることは許されない。詩のトポスとは「ある輪郭をもった特定の場所と、定型として用いられることばの集積が、詩歌の力によって結びつけられている」(齋

藤希史）ことである。勿論、本邦でも、和歌、俳句による詩のトポスを惹起させる場所も多い。

今回の江南の旅は、まさに詩のトポスの旅であり、名詩のふるさとの探訪であった。詩的名勝は、「特色ある地名や、それに関わる故事を発想の中心として詠まれた詩跡の作品に、そこに賦与された風土性、時代性が独特の表現効果を生みつつ、長く愛唱され今日に至らしめ、名詩に因んで遺蹟や伝説が作られるのである」（松浦友久）

その意味で、西湖なら、現存する白堤・蘇堤の美観と相俟って、白樂天「春題湖上」と蘇軾の「飲湖上初晴後雨」を初めとする数々の詩が、通常の観光では得られない、漢詩旅行の醍醐味を満喫させて呉れたのである。

勿論、「楓橋夜泊」寒山寺しかりである。蘇州盤門は李白「蘇臺覽古」を読んで呉越春秋に思いを馳せさせられる。

そして、何も難しい漢詩ばかりでなく、西条八十「蘇州夜曲」だって日本人にとっては、ある種の詩のトポスを成立させて呉れるのだろう。

そういう意味で、江南は日本人にとつても、古くて豊穡な歴史を満喫させる、極めて親しみやすい場所である。これこそ、旅の楽しみを倍増あるいは三倍増にしてくれる要素に違いない。これに銘酒とグルメが付加されれば五倍増にもなろう。

〈滄浪亭の交流会〉

何と云つても、今回の旅のメインのイベントは日中協会後援の蘇州の世界遺産「滄浪亭」での滄浪詩社との交流会でした。小生も新参者ながら出番があり、「詩人蘇軾への愛好度をスピーチ後、恥ずかしげも無く駄作の書を見せて、それを中国の方に朗詠して戴く」という趣向に臨んだのでした。旅の前に、この全く初心者 of 書を提示することに逡巡していましたが、神漢連水城副会長様に後ろから押して戴いたお陰で軽卒に蛮勇を發揮した次第です。

ちよつとドキドキでしたが、「案ずるより生むが易し」で、私の拙いスピーチの後、さすが詩社の魏嘉瓚先生から見事な朗詠をして戴き、我々一同大感激でした。その朗詠は、マンドンと蘇州語の二通りで、両者ともに声高らかな調子で、その言葉は一語一語ゆつくりと上品に発音され、極めて優雅な音楽的抑揚に印象深く、実に魅力的な耳に快いものでした。更に、書道家王淵清先生から、小生の書の中から四文字をその場で書いて小生にプレゼントして頂くというハッピーニングがあり、真に大感激の行事でした。

さて提示した書は以下の蘇軾「前赤壁の賦」の一部で、莊子の影響の強い蘇東坡哲学の眼目の、「逝者如斯、而未嘗往也。盈虚者如彼、而卒莫消長也。蓋將自其變者而觀之、則天地曾不能以一瞬、自其不變者而觀之、則物與我皆無尽也。而又何羨乎」でした。これは、莊子の思想、齊物論の基いた万物斉同の實在の真相を觀照した思索の詩的表現であります、真に

厚顔無恥にも、この蘇軾の名句を、悪字を以って三本の条幅紙に埋めて、交流会へ呈示したもので、今もって、恥ずかしい気分も残っています。

詩社の先生の朗詠が耳に残り、先年の映画「レッドクリフ」で、赤壁での曹操が戦の前に「短歌行」を朗々と詠ずる、中国詩吟詠の勇壮な美しいシーンをも思い浮かべさせるものでありました。この見事な声調の詩社の朗詠は、暫く忘れられない深い感慨を与えてくれるものでした。

これ等の楽しみには何よりも、この旅行を計画され、数々のご苦勞をお掛けした、山口団長を始めとする関係者の皆さまの尽力であり、深く感謝したい気持ちで一杯であります。



滄浪詩社との交流会

牛山知彦

九詩期会の例会が終わると、有志が集って一杯やりながらサークルの運営について意見を交わしている。

あるとき、「先輩サークルに倣って、そろそろ吟行会でもやろうか」という意見が出たが、ほとんど酒の勢いだと思うが、いつも間にか「どうせなら漢詩の本場中国に行こう!」という話になっていた。

そんな夢のような酒飲み話が重陽節（旧暦九月九日）に合わせて実現されたこと、ましてや単なる観光旅行に止まらず中国の漢詩愛好家との交流の場を持ったことは、未だに驚きである。中心になって労を惜しまず奔走された山口代表、日中協会の後援を取付け、企画を担当したメディア新日中に橋渡しと目配せをして下さった梅村さんには改めて感謝の言葉を差し上げたい。

さて、このツアー実施における最大の意義は、中国で漢詩作りを楽しんでいる人たちとの交流の端緒を作ったことだと思う。昔々はいざ知らず、ここ最近でこのような企画を含んだ中国ツアーは聞いたことがない。この小さな一歩を、今後より良く大きく広げてくださる方がいれば、この一文が参考になれば幸いである。

今回、交流先となった蘇州滄浪詩社の選定はメディア新日中に一任した結果であり、ほかの地域にも同様の詩社は存在するものと想像される。ただし、「つて」が物を云う中国においては、今回のような、日中協会の「後援」看板や現地事情に精通し蘇州市当局にまで詩社の紹介依頼が出来たメディア新日中の存在は、大きな力となったと考える。

古都蘇州における交流会は大変趣き深いものであった。

まずはその交流の場であった。舞台は、世界遺産「滄浪亭」内の特別室。通常の応接には蘇州大学内の施設を利用するそうだが、今回は幸運だった。

この特別室は一般観覧者は入室出来ない場所で、関係者は指紋認証キーが内蔵された古い木製の扉から入室する。中国風の格子の窓枠、扉からなる部屋の内部は、重厚な調度品が並んだ中国式の応接会議室となっている。滄浪詩社はこの部屋で例会を開いているようで、何とも羨ましい。

それから、交流相手の蘇州市滄浪詩社（蘇州市詩詞協会）の皆さん。詩作の出来ることが入会条件とのことであり、入会してから勉強を始める方も多い我々とは、だいぶレベルが異なるようである。ただし、弁護士、教育者、書家、画家などの現代の文人の集まりといった



ところらしいが、当日の出席者は我々と同じリタイア組も多そうで何となく親しみが感じられた。

ただし、初めてのことでゆえ具体的な交流の内容・進行が、事前にはよくわからなかった。あらかじめ配布された「漢詩交流概要」には、「方式」として次の記載があった。「双方は、自己紹介から、漢詩勉強と鑑賞の心得を少し紹介。蘇州詩詞社のメンバーは、自分たちが作った漢詩の意味を説明。蘇州詩詞社のメンバーは、水墨画、または書道、琴の実演を披露。」とあった。だが、この資料を作成したメディア新日中も漢詩交流会の経験はなく、当然参加者の中にも経験者は皆無。私も杭州西冷印社で書道の交流会として書を交互に書き合う書会の経験はあるが、今回の場合は演目も多いし聞いてみたいことも多いし、いったいどうなることやら想像がつかなかった。

それでも、当方も対抗上、演者を用意しようということ、山口さんからは詩吟の出来る人は詩吟を、私には書の要請があった。それでも、進行がわからないので、事前の打合せや演目の確認などは一切ないまま交流会を迎えていた。

当日の交流会の詳細は山口代表の作成された報告書に記載があるが、事前に知らされていた「方式」とは少し異なった。

まず、住田先生の挨拶と全日本漢詩連盟と神奈川県漢詩連盟の紹介。

次に周社長の挨拶。

その次は、山口団長の挨拶と資料を配布しての説明。神奈川県漢詩連盟および九詩期会の活動や日本人の好きな漢詩、日本人の漢文・漢詩受容の歴史、中国語のわからない日本人の漢詩作法に及んだ。立派な資料は、我々も初めて拝見してビックリ。

山口さんからは、以上の説明のあとに詩作に関するいくつかの疑問についての話もあったが、残念ながらその場での回答はなかった。

そうこうしているうちに、山口さんの隣に陣取った中野さん（第十期）がやおら立ち上がり、蘇東坡が好きだというスピーチを開始し、持参の書を披露。

「前赤壁の賦」を朗詠してほしいと先方をお願いしたところ、快く次々と素晴らしい声で朗詠が続いた。

先方の朗詠は五名。当方は、住田先生が返礼の詩吟で応えた。

それから、先方の書家と画家による席上揮毫が始まり、もうそろそろ時間切れかと思っていたら、私の出番となった。



私は、今回のツアーの季節に因んで重陽節の風景を詠んだ杜牧の七言律詩「九日齊山登高」を揮毫に選んだ。

江涵秋影雁初飛　與客攜壺上翠微
塵世難逢開口笑　菊花須插滿頭歸
但將酩酊酬佳節　不用登臨恨落暉
古往今來只如此　牛山何必獨霑衣

この詩の第八句には「牛山」が詠み込まれていて、拙宅の襖にも書かれている私のお気に入りである。揮毫が終わったところで、思わず「This is my name.」と「牛山」の文字を指でさし示していた。

このあと、滄浪亭特別室中庭での記念撮影や詩集の交換が行われ、交流会は無事終了した。

ぶつつけ本番・結果オーライという状況であったかと思うが、先方のご好意と当方の熱意とで、我々にとっては大変印象深い交流会となっていた。

ただ、出番があると言われていながら朗詠の機会がなかった松本さんと長岡さんには大変申し訳ない思いである。



訪蘇州滄浪詩社

蘇州滄浪詩社を訪ぬ

重陽秋氣入窗櫺

重陽の秋季 窓櫺そうらいに入り

相會詩盟滄浪亭

詩盟 滄浪亭に相會う

中日揮毫添雅趣

中日の揮毫 雅趣を添え

吟聲清逸客中聽

吟聲清逸にして客中に聴く

○重陽Ⅱ旧曆九月九日。○窓櫺Ⅱ窓の格子。○詩盟Ⅱ詩の友。

なお、今後新たに交流会を実施しようとする方々のために、こうした方がよかったかなと後になって気がついた点を以下に記載しておく。

・交流会の当方参加者の中では、役割分担を決めて事前の打合せを。

撮影（写真・動画）、録音の役割を決めずにいたので、感動的な貴重な朗詠の録音・動画がほとんど残されておらず、もう一度聞くことが出来ないのが本当に残念。

住田先生の口頭説明と山口代表の配布資料で、全日本漢詩連盟の会員数の説明が重複し、その数に相違があった。

出番の予定されている人が何人いて、自分にどれ位の持ち時間があるのか、あらかじめ参加者が自覚していなかった。

・先方に回答を求めたい事項については、あらかじめの提示が必要だったか。

交流会席上で、詩作に関する質問をしたが先方からは回答がなされなかった。

・席上揮毫の準備は当方でも。

ガラス製灰皿が墨池と文鎮がわり。紙はその場で全紙を半分に切っていた。下敷きや印泥はあったが、出来ることなら筆と雅印以外の道具類も持参すべきだった。

・通訳は複数名いた方がよかった。（中国語を勉強しておくべきだった。）

交流昼食会は二テーブルに分かれて食事をしたが、通訳のいないテーブルでは中国と日本側との会話が成り立たず、話したいことも話せずに料理を食べるしかなかった。

最後に、今回のツアーの趣旨を理解・賛同して参加くださった住田先生・古田先生、九詩期会メンバー、他サークルの面々とは、ツアーを楽しむ時間を共有したことによって得難い関係を築くことが出来た。

また、このツアーの成果を今後に引き継ぎ、日中漢詩交流を継続することが出来ればと思わずにはられない。

滄浪詩社について

蘇州市滄浪詩社（蘇州市詩詞協会） 任意団体。唐・宋などの漢詩に興味を持っている弁護士、大

学の先生、古典文学の研究者、定年退職した教育者などにより構成される。会員は百人未満。

漢詩についての公益セミナーの開催、漢詩、詞などを自ら作成し、コンテストを行ったりしている。

一方、詩の他に、書道、絵画、琴、囲碁などに長けた人も多い。（メディア新日中の紹介より）

・機関誌「姑蘇吟」記載の住所は 蘇州市人民路一〇八八号 市文連内

お世話になった方々

周秦 詩社長

（昆劇の研究者、蘇州大学教授）



魏嘉瓚 前詩社長

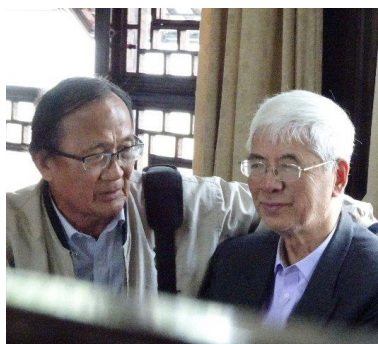
（全国に著名な朗詠大家）



朗詠を披露していただいた方々。

朱九如 氏（蘇州中学校先生）

呂守経 氏（滄浪詩社会員）



馬小萍 氏（滄浪詩社副社長）



書道披露 王淵清 氏（書道家）



水墨画披露 顧逸 氏（画家）

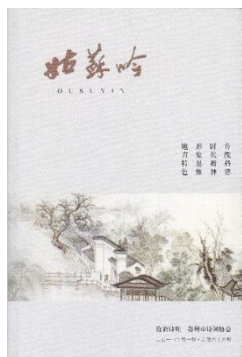


丁鳳萍 氏（滄浪詩社秘書長、副社長）



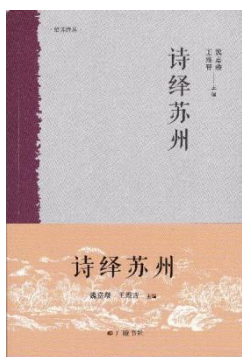
交流会でいただいたもの

1 「姑蘇吟」



がある。これは二十冊いただいたのでツアー参加者と神漢連会長等に贈呈した。

2 「詩繹蘇州」



「姑蘇詩叢」の副題あり。魏嘉瓚、王維晋 主編、広陵詩社書社、二〇一三年。「姑蘇吟」と同じA5判、三七九頁。ソフトカバー。これも詩集で四百首あまりを収録。

編者の魏嘉瓚氏は滄浪詩社の前社長で、交流会にも出席され、朗詠を披露いただいた。氏は朗詠の大家とのこと。



④ 「観花問道——個筆墨本体論者の創作文本」

王涓清氏の著書。(西泠印社出版社、2014)

ソフトカバー 百五十頁 285mm×285mm 正方形。

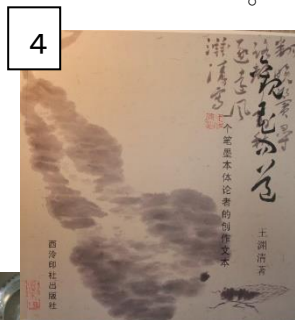
画に賛を入れた詩画集のような本。植物の画が多い。



③ 王涓清氏揮毫の書

交流会で席上揮毫していただいた書。

中野さんが朗詠を依頼した「前赤壁の賦」の「則物與我皆無尽也(則ち物と我と皆尽くる無きなり)」の文章から「物我無尽」の四文字を選んだもの。



5 顧逸氏揮毫の画



同じく席上揮毫していただいた画。顧逸氏は画家で、「臻性化逸」と題した自作紹介のパンフレットもいただいた。「臻（シン、いたる）」は「どんだんすすむ、しきりにやってくる」という意味。

6 孫小青氏の書（魯迅の詩）



孫小青さんは弁護士で、当日は所用ができて来られなかったが、書だけ届けてくださった。末尾に「贈神奈川県漢詩聯盟」と書かれている。

魯迅が一九三一年、日本人劇評家升屋治三郎に贈った「贈日本歌人」と呼ばれる詩である。

春江好景依然在 春江の好景 依然として在り

遠国征人此際行 遠国の征人 此の際行く

莫向遙天望歌舞 遙か天に向かい歌舞を望むこと莫れ

西遊演了是封神 西遊 演じ了する是れ封神

○春江Ⅱ春申江Ⅱ黄浦江

こちらからは神漢連からいただいた神漢連叢書の「歩こう神奈川、漢詩八十景 神奈川漢詩紀行」と「静夜思トートバッグ」をお土産としてさしあげた。

住田先生と古田先生はそれぞれご自分の詩集を渡された。

席上揮毫に対しては、牛山さんが書でお返しをした。



蘇州大学呉雨平教授について(メディア新日中の紹介より)

学歴

蘇州大学中国文学部の出身で南京軍国際関係学日本語課で日本語を学び、蘇州大学で比較文学と世界文学専門を専攻し、修士号、博士号を取得。二〇〇五年から二〇〇六年には日本の関西学院大学文学部客員研究員であった。

勤務先

一九九一年から蘇州大学文学部に勤務。二〇〇三年から教授。

論文

- ・「『万葉集』誕生的中国文化背景」(塩城師範学院学報)二〇〇三
 - ・「古代東亜漢文化圏中的 懷風藻」(シンガポール)(新世紀学刊)二〇〇五
 - ・「幕府執政者意識形態与日本五山漢詩」(蘇州大学学报)二〇〇七
 - ・「儒学的日本化与江戸漢詩」(深圳大学学报)二〇〇七
 - ・「日本漢詩与古代東亜各国的文化交流」(社会科学戦線、二〇〇七)
- など日本の古典や漢詩に関する論文多数あり。

著書

- ・「比較文学基本原理」(共著、蘇州大学出版社、二〇〇二)
- ・「東西方比較文学史」(共著、北京大学出版社、二〇〇五)
- ・「秘書学与秘書実務教程」(主編、暨南大学出版社、二〇〇八)
- ・「橘与枳：日本漢詩的文体学研究」(專著、中国社会科学出版社、二〇〇八)など。



九詩期会江南漢詩ツアーに寄せて

平賀康雄

そもそも九詩期会のメンバーであり、日中協会の役員をされている梅村さんの肝いりで催されたツアーであったので、一般旅行社のツアーとは一味違う得難い旅を楽しむことができた。

まず、基本的には①当地の漢詩愛好者や研究者との親睦的な交流が出来たこと ②各宿泊地のどのホテルも第一級の施設であったこと ③各地で出た料理が食べやすく、美味しかったこと ④概ね好天氣に恵まれた（最終日を除き）等により楽しい旅が出来たことと思う。

主な旅程としては上海豫園、田子坊散策、杭州靈隱寺参拝、西湖周辺散策、博物館見学、蘇州漢詩関係者との交流、蘇州大学講義、平江路、水郷烏鎮、寒山寺、夜花園での崑劇他と巡り、盛沢山で充実した旅だった。

紙面の都合もありその一々の出来事を書き連ねることはできないが、特に漢詩ツアーとして個人的に印象に残った場面について二つほど記したい。

ツアー第三日目の一〇月二七日、この日の日中には今回のツアー中のメインイベントともいべき蘇州滄浪亭での蘇州詩友会との交流会や蘇州大学での呉教授講義の受講があった。交流会においてはお互いの紹介、先方の詩吟や書画の披露、当方からは住田先生の詩吟、牛山さんの揮毫、中野さんの書や文章の披露等があったが、それらの詳細のご報告は他の参加

者の方々にゆずることとし、私はその日の宵の一時についての個人的な感懷を少しばかりお伝えしたく思う。

当日の旅程はほぼ終って、あとは夕食を取る段となった。バスから降り、皆で金鶏湖畔にある蘇州料理の名店「得月楼」に向かつてしばらく歩いた。幾店舗も並ぶ食堂名店街の通路を歩く途中、建物の間から半月ではあるが煌々と輝く月が見えた。時あたかも重陽節の前夜にあたっており、ということは、まさに当夜の月は上弦の月であることが知れた（重陽は旧暦九月九日、上弦の月は例月七・八日）。丁度その名も得月楼の店前で見る月に感慨を覚え、つい隣の人に感嘆の言葉を発せざるを得なかった。

得月楼の蘇州料理はどれも素晴らしかったが、特に皆が期待していた上海ガニ（名称と異なり蘇州名産だという）の食べ方を、同席されていた中国篆刻界の第一人者汪先生から教えていただき、無駄なく美味しく食することが出来た。

更に住田先生ご推奨の紹興酒、古越龍山8年物は美味しいことこの上なく（今回の旅において飲んだ紹興酒はほぼ



住田先生の振る舞い、丸テーブルを回して、ふだん御酒をたしなまない人にまでお勧めして飲んでいただいたりした。住田先生は斗酒なお辞せずの神漢連でも指折りの酒豪であるといい、いつも楽しく飲んでおられるようだ。

そんな事柄に関連してもう一場面報告したのは日付は遡り、前日の二六日のことである。昼食後、西湖岸にある浙江省博物館で、その地の各時代の陶磁器や書画等を見学したが、その中で、青磁製の高さ一〇cmほどの高足靶杯(馬上杯)に目が引き付けられた。実はその馬上杯もさることながら、その説明書きにより引き付けられた。説明書きに曰く「杯の内底に書す『人生百年長在醉、算来三萬六千場』」と。最初の句は「人生百年酔いに在ること長し」と読めるが、次がやや解らない。

これらをメモに書き付け、早速博物館の入口近くで休憩しておられた住田先生に教えを乞うた。先生は即座に「三万六千場というのは三万六千回、三万六千日(百年)」という意味、人生生きているあいだ中、ずっと飲み続け、酔っぱらっているという事だ。まさに私の人生そのものだよ、面白い言葉を見つけたものだな」と楽し気におっしゃった。

酒豪かつ達観されておられる住田先生には「楽しく豪快に飲み続けて納得出来る人生」との意味だろうが、私などに向けては「人生ずっと迷い続けている」との訓戒の言葉だとも受けとめた。

最終日の帰国便は台風襲来の為欠航となり帰国は一日遅れたが、どうと言うことも無かった。急な事態にもかかわらず、中国人ガイドの朱さんの計らいで空港からそう遠くない適宜なホテルが取れ、翌日の早めの便もうまく取っていただいた。誰も帰国後の日程に支障をきたす人もおらず、却って予定外の別な料理も一食多く楽しむことが出来てよかったなどと言いつつ合った。そして何ら恙なく、一転晴れ晴れとした天候の中を晴れ晴れとした思いで帰ってくる事が出来た。

加えて申し上げたいのは、今回の旅は漢詩ツアーの名にふさわしく住田、古田両先生の旅行中の即興の漢詩のご披露をいただけた事、まさに他では得難い旅となった。

最後に、この江南漢詩ツアーが実現されるについては、特にツアーの団長をおつとめいただいた山口さんには、それこそ旅行の前、中、後に亘って、幾度となく複雑で面倒な手続きや交渉や、ご連絡等でお骨折りをいただき心底感謝申し上げますのみです。

(附記) 中国臨済宗の名刹靈隠寺は二十数年ぶりの再訪でした。改めて愕いたのは、共産国であるのに、多くの参拝者(特に若者)が、各伽藍の前で、お線香をあげつつ熱心にお詣りしている姿を見たことです。

再詣杭州靈隱寺

再び杭州靈隱寺を詣す

有縁再詣古禅宮

縁有りて再び詣す 古禅宮

道是五山蘭若雄

道う 是れ五山蘭若の雄

愕觀賽人年少夥

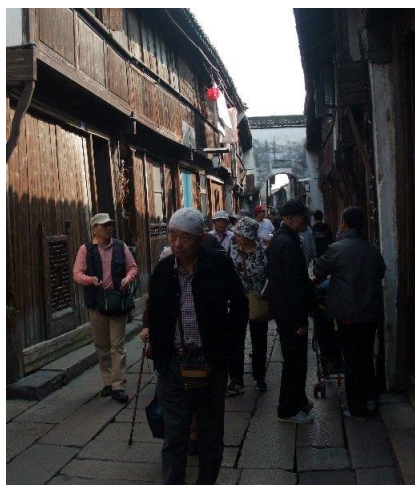
愕き觀る 賽人年少の夥しきを

叢林菊月薰煙中

叢林菊月 薰煙の中

○五山 中国禅宗の代表的な五つの寺(靈隱寺を含む) ○蘭若 寺

○叢林 ここでは修行道場の意



烏鎮にて

江南漢詩ツアーに参加して

長岡巨知・容子

ひろのり

「寒山寺に行くなら、詩碑の前で『楓橋夜泊』を吟じなさい。」詩吟を学んでいる教場の先輩から半ば命令口調で勧められた。その日から毎日風呂場で練習。教場でも練習の進歩状況を確認される始末。「それじゃダメダメ。もつと情を込めないと。張継の気持ちになって吟じないと。ハイ、もう一回！」

さて、本番当日。『楓橋夜泊』詩の刻された石碑の立ち並ぶ中、朱さんの「この碑の前で吟じて下さい。」の声に促され、松本さんに吟題、作者名を発声して頂き皆さんと一緒に「月落ち鳥鳴いて…」と声張り上げて吟じた。今もあの時の情景が胸に甦る。緊張で足が震え、背筋には冷汗が流れ声は上ずり、何とか「夜半の鐘声客船に至る」と吟じ終える事ができた。詩吟は初めての方もいらしたのに皆さんお付き合い下さり、感謝、ただ感謝。感激、また感激。嬉しさ限り無し。

帰国後、教場でその先輩曰く、「良かっただろう。俺も十年前にやったんだよ。現地の中国人も周りにいた人達が拍手してくれたりしてね。」とまるで我が事のような喜びよう。「どんな風にやったか皆の前で一吟聞かせてくれよ。」というわけで又冷汗をかくことに。上が

りぐせはなかなか治らない。一生の思い出になるであろう貴重な体験をさせていただいた。夢のような一分半。

(巨知)

長岡巨知

江南客旅

江南客旅

千里鵬程萬里遊

千里の鵬程 万里の遊

尖塔眼下大江流

尖塔眼下 大江流る

興亡一夢霸王恨

興亡一夢 霸王の恨み

今古茫茫洗旅愁

今古茫茫 旅愁を洗う

主人の趣味である篆刻、詩吟、漢詩。何れも私には関心薄く、根を詰めて石を彫っていれば「肩も凝るし目も益々悪くなるんじゃないの？」吟じていれば「音がズレてますよ、私に聞こえないところでやって下さい」自作の漢詩を見せられても「何だかよく分からないわ、ごめんなさいね」という始末。あげく、よくもまあ余り人がやらない事を好むものだと日頃



は冷めた目で見ておりました。がこの度皆様とご一緒させて頂き、いずれも素晴らしい方々ばかりで楽しく実りある時を過ごすうち、私の趣味である茶や陶芸とも全て通じてゆく思いを実感でき、主人を改めて見直せたのが何より嬉しい事でした。

旅慣れぬ私達でしたが皆様に助けられ「旅は道連れ世は情け」を感じつつの日々。中国文化人の方々との交流、蘇州大学での講義、得月楼での夕食会にいらして下さった汪先生とのひととき。（次の日にサプライズでわざわざ主人に本を届けて下さいました）

普通のツアーでは経験できない事ばかり。又こんな旅をしたいなあと感じたことでした。

団長として準備から旅中、又帰国後までご苦労下さった山口様、色々お教え下さり旅の厚みをグッと深めて下さいました、住田、古田両先生、そして温かく楽しく共に過ごさせていだいた皆様、本当にありがとうございました。（容子）



蘇州博物館近くで

漢詩のふるさと江南地方を訪ねて

松本祐輔

第一目 旅のはじまり

約三十年前に初めて北京に観光旅行をして以来の中国行きである。中国の経済発展が著しいことをニュース等で聞き及んではいるものの、その変化をこの目で確認し、そして九詩期会の皆さんと、旅行プラン概要に記されるように、「漢詩の舞台となった街を訪れ、文化だけでなく中国現地の漢詩愛好家とも交流を深める」旅である。

今回の旅は妻も特別に同伴し、健康の不安も消えて安心して旅を楽しもう！ 期待に胸が高鳴る。

羽田発八時半ということで、始発の電車に乗るため四時起床は何年ぶりだろう。これを機会に早起きに挑戦？ 無理なことは自明。

飛行機は上海に向かつて順調に飛行するも、到着直前の海面が茶褐色の異様な状況であったため、何が原因なのか非常に気にかかった。昭和四十年〜五〇年代の日本の環境汚染がふと思ひ起こされた。

上海浦東地区

上海浦東空港から中心部に向かう際の街並みに圧倒された。私の想像を遥かに超えた近代的な超高層ビル群が建ち並ぶ様子は東京を凌ぐようであった。浦東地区は二十年前には工業・農耕地帯

で在ったとのことである。日本では到底考えられない。再開発計画をして地権者の同意を得て着工出来れば、事業は終了したのも同然と言われるほど、用地の権利取得がカギを握るようだ。良し悪しは別として、国家制度の違いを深く感じさせられる思いであった。

それはさておいて、中国の夢を象徴したような種々のカラフルなビル群が、私が一番と競い合っているようで、見事の一語に尽きる。改めて中国の目覚ましい経済的發展を思い知らされた。ちよつと心残りは、ランドマークタワーに上つて上海の街並みを一望出来なかったことだが、元氣であれば次の機会を待とう。

豫園商城

一日目の旅の地、豫園商城の散策と昼食が思い起こされる。先ず驚かされたのは商店街に溢れる人々々々である。

西洋人らしき顔立ちは殆ど見当たらずアジア系である。日本にも大勢の中国人が観光旅行に来て、爆買いが話題になったが、多くの中国人が観光旅行を享受出来るようになったのだろう。

このエリアは、最先端都市の浦東と対照的に中国らしき伝統を色濃く残した街並みの観光スポットだ。昼食は人混みの中をガイドの朱さんに、小籠包で有名な**南翔饅頭店**に案内された。機内食を食べて時間が経っていないにも拘らず完食した。特に名物の小籠包は格別だった。舌を火傷しそうにし



ながらの肉汁の味は、いまもなお、舌に残り唾を飲み込む有様である。

第二日目 霊隠寺

霊隠寺の由来等は他に譲るとして、山門口に在る黄色い壁に咫尺西天しせきせいてんと書いてある。意味は仏国世界の霊隠寺に着くと、西方にある極楽浄土との距離は、もうほんの僅かということだそうだ。さあ極楽浄土の世界に行こう。山門に入ると左の奥に岩山の飛來峰があり、山肌には多くの石仏が彫られており、私の目を引き付けた。ここで拙作の漢詩を吟じてみた。

霊隠寺石佛

霊隠寺石仏 れい いん じ せき ぶつ

彫岩石佛入双眸

岩に彫る石仏 双眸に入り い わ ほ せき ぶつ そう ぼう い

信歩探尋足勝遊

歩に信せて探尋すれば 勝遊に足る ほ まか せん れい ひ ら い たん じん しやう ゆう た

仙霊飛來霊隠寺

仙霊飛來す 霊隠寺 せん れい せう れい せん じ

峯崖景象四時幽

峰崖の景象 四時幽なり ほう がい けい しょう し じ ゆう

崖に彫られた石仏が、峰と一体となつて清勝であつたことを意図

したが、起承転結、詩語の繋がり等を心配しつつ。



靈隱寺については、その他色々と思ひ出はあるが、紙面の関係上割愛する。約一三〇〇年前に創建されて現在まで脈脈と続いた歴史の重みを感じている。

西湖周辺散策

西湖ではバスの乗り入れが禁止されているため、風光明媚な西湖を一刻も早く散策すべくタクシ―を拾おうと手を挙げて待てども一向につかまらない。そこで、時間の無駄と皆で西湖に向かつて歩み出した。二十分程で西湖の畔にやつと辿り着いた。

水面は光を帯びて鏡の如くきらきら輝き、遊覧船がゆつたりと浮かんでいる。絵を見ているようで疲れも吹き飛んでしまった。西湖の名が蘇東坡によって、春秋時代の美女西施に因んで名付けられたのも頷ける。ここで句と漢詩

蘇東坡の名付けし西湖眼前に傾国の美貌蘇りけり」。

西湖憶西施

西湖西施を憶う

水光潋灩午風輕

水光潋灩として午風輕し

閒泛錦帆情感生

閒に泛ぶ錦帆情感生ず

絶景西湖看不盡

絶景の西湖看るに尽ず

西施美貌十分明

西施の美貌十分に明らかなり

また、浙江省博物館の収蔵物や、篆刻で有名な西泠印社の敷地内の建造物も、歴史遺産に相応しく深く心に残る。

ここで再度タクシーの顛末に話を戻そう。帰路は当然にタクシーで帰ろうと空車に合図するが停つてくれない。ガイドの朱さんが交渉に行くも一向に埒があかない。監視員もいるが、何のためにいるのか解せない。しかしタクシー運転手が乗車拒否をしている謎が解けたのである。近距離の客は全て拒否して、遠距離の客を探しているとのことであった。そこで、割増料金を払えば乗車可能であることが分かった。私たちは規定の約三倍の料金を支払つて乗車できた。

日本では、理由なく乗車拒否をしようものなら、監督官庁から厳罰をうけるとのことで、現在はずり起らない。帰国時に駅からタクシーを利用したら、トランクにスーツケースを収めてくれるなど、丁寧な接客は素晴らしく感じた。改めて私なりに中国の乗車拒否の原因は何かと考えると、やはり規定料金の安さにあるのではないかと思う。三倍支払つても日本のワンメーターにも満たなかった。これでは運転手の接客が、日本のようなわけにはいかないのも当然とおもう。旅行中の物価からしてもまた、摩天楼の上海の街並みを見る時、そのギャップを感じるのは私一人だろうか。旅は楽しみと共に教わることも多い。

第三日目 蘇州滄浪詩社交流会

今回の旅の主な目的である交流会は、蘇州で最も古い中国庭園「滄浪亭」で行われた。鯉の泳ぐ堀に囲まれた歴史を感じさせる建物だった。入り口の門には**滄浪亭**と堂々と記されていた。交流会に先立ち園内を見学したが、外見から受ける印象とは異なり園内は意外と狭く、曾ては今の数倍の広さだったという。それでも築山の東屋から見渡すと、点在する建物が全て回廊で繋がっており、変化に富んだその光景に、ゆったりとした気分になることが出来た。東屋の両柱に「**清風名月本無價**」「**近水遠山皆有情**」と書かれてあった。滄浪亭とどんな関わりがあるのか辞典で滄浪を調べたら、河の名で漢水（揚子江の最大の支流）とありピンとこず、続いて次の項に滄浪歌で、漁父の**歌何事も自然の成行きに任すべき**を言うことだった。楚辞に歌曰、滄浪之水清兮……とありこちらの方が命名の由来に馴染むようである。また、回廊の壁に窓枠があり、通風と採光の機能を持ちつつ、種々の格子模様の素晴らしい窓が連なっていた。伝統のなせる技に見入ってしまった。

交流会に当たっては、山口団長がパンフレットなどを準備されており、住田・古田両先生がご一緒なので、安心して会に参加できた。

交流会で時間に余裕がある時は、私も詩吟を詠うよう要請されていたことも有り、実は準備をしていた。（機会は無くてホットした次第……）

交流会は、初対面と思えない程和やかな雰囲気の中で行われ、親しみを感じさせた。そして、蘇州滄浪詩社会長の朗詠は、吟声朗朗と響き素晴らしく、聞きほれてしまった。また、書道の交流では、牛山香流さん揮毫に本場中国の書家を初めとして、皆さん方の万雷の拍手に包まれた。今回の

交流は、漢詩愛好家の交流であつたが、日中友好親善に役立てれば幸いです。隣国との友好は、相互に相手を認め尊敬することが基本であると思う。今後このような市民サイドの交流が益々盛んになることが望まれる。

蘇州大学呉雨平教授の講義

漢詩の母国中国と、それを受け入れた日本の漢詩について講義されたが、内容は山口団長が要領よく報告されているため割愛します。

ただ、住田先生の即興の詩に驚かされたので私の下手な句でその思いを……。

漢詩説く蘇州大学教室でわが師忽ち漢詩で返す

呉教授と学生、そして私達も度肝を抜かれて拍手喝采であつた。

第四日目 水郷烏鎮 東柵「散策」

朝一番の訪問地、雅園老人大学見学は、ちよつと私が想像していたのとは違い、老人施設ではなく裕福な家族が入居する施設のようであつた。日本人の一般人では入居は難しそうだ。さて、東柵の散策路は大変な人混みで、お祭り騒ぎのようであつたが、一方、川辺に目を向けると水際に沿つて古色蒼然とした民家が建ち並び、船が悠然と行き交う光景であつた。遊覧船に乗つて杯を傾けることが出来たら、さぞ優雅だろうが残念ながら今回は叶わず。



街全体は黒茶色で木造建物が相当の年代を経ており、上海の街並みと対照的である。路地に入ると明清時代の多くの木製寝台が陳列されていた。寝台と言っても木彫りの精巧なもので装飾されており、立派な芸術品である。どんな人がどんな思いで毎夜過ごしたのだろう。また、作家茅盾記念館もあり、勉強部屋などが往時を忍ばせる。

寒山寺

寒山寺は、張継の楓橋夜泊の転句にある寺であり、詩吟で詠じているため興味を持って訪ねた。やはり有名な寺だけに立派で、大勢の人が訪れていた。

寒山寺の壁には張継の楓橋夜泊をはじめとして、いくつもの漢詩が掲げられていた。見学途中に楓橋夜泊を皆で吟詠したのは爽快であった。ふと、西条八十の「蘇州夜曲」三番の歌詞に、涙ぐむよなおぼろの月に鐘がなります寒山寺とあるのを思い出して、全く二人の置かれた状況は違いますが、鐘の音の響きは聞く人に何を訴えるのかと思いい句

西条の蘇州夜曲の鐘の音は張継ありて如何に聞くらん

夜花園 「牡丹亭」



北京で約三十数年前に京劇を観劇した思い出がある。劇の題名も忘れたが、カラフルな衣装で、軽業師のような素早い動きをして、観客を沸かせたのを覚えている。昆劇も、中国の伝統文化に彩られた舞台芸術の精華を脈々と伝えている。京劇と同じく衣装・身のこなし・音楽等素晴らしかった。動画を見直して、改めて繊細で絶妙な演技に感動している。

第五日目 蘇州博物館

博物館に入場するのに長蛇の列で時間を要し、見学も混雑していて、残念ながら良く鑑賞出来なかった。ただ博物館は、デザインがシャープな三角形を多様化した構造物で、非常に特徴的であった。数年前に、パリのルーブル美術館を訪れた際、中庭に同様な三角形の建物が、ガラスで採光を取り入れていたのを思い出した。後に設計者が同一人物である事を知った。陳列物のみならず、建築物は一見の価値があると思う。その後、蘇州シルク研究所を見学し、レストランで昼食を摂り、帰国のため上海浦東空港に向かった。

空港に到着して異変に気づいた。日本列島に台風が上陸するので、羽田空港行きは欠航とのことであった。今夜の宿はどうなるのだろうかと不安が高



まつてきた。そこでその気持ちを茶化した一句

飛行機が羽田に飛ぶを否と言ひ旅客途惑い宿取りに飛ぶ

実際は朱さんが手配してくれた宿に落ち着き、一安心出来た。これまでは、全てガイドの朱さん任せだったが、ここからは全て自分達でしなければならぬ。オーバーに言えば、今までとは違って、遭難した仲間同士が、団結して困難に立ち向かうような雰囲気を感じた。古田先生等のお陰で支払いも済み、宿に落ち着くことが出来感謝である。そして隣接のレストランで夕食を摂ることとなったが、古田先生に上手に注文して頂いた。正直、今までのホテル等の夕食は、似たり寄ったりで飽きて来いたので、新鮮な味わいを得ることが出来た。山口団長の司会で、楽しい夕餉のひとは今も眼前に浮かぶ。食事代金も然るべき支払いを覚悟していたが、あまりの安さに全員びっくり仰天であつた。正直なところ、思いもしなかつた欠航は、私には番外の良き旅の思い出となつた。

旅の終わりに

私達夫婦がこれまで参加した外国旅行は、団体旅行ばかりであつた。

今回の旅は目的が同じ仲間との、団体旅行とは違つた味わいのある旅となり、その目的を十二分に果たすことが出来た。住田・古田両先生及び山口団長を初め楽しい旅を共にした皆様に感謝を申し上げる。

九詩期会江南漢詩ツアーに参加して

松本清子

私にとりまして漢詩は、高校時代に漢文の授業で少し学んだのみで、ほとんど無縁なものでした。そんな私が今回の旅にご一緒させていただくことになりましたのは、健康優良児だった主人が、後期高齢者の仲間入りをした途端に入退院を繰り返すようになり、この度の海外ツアーへの一人参加に夫婦共々少々不安を感じざるをえなかったためです。幸い旅行中、主人は大変元氣でしたので、結果的に私の心配は取り越し苦労で、私自身にとりましても大変楽しい旅となりました。今回の旅は五日間に及び、数多くの思い出ができましたが、紀行文については主人が別途書かせていただいておりますので、こちらでは私が特に印象に残った事柄を、簡単にではありますが述べさせていただきます。と思います。

中国の発展

中国には三十年ほど前、北京へ旅したことがあります。当時、紫禁城の入口付近一帯はブラックのような住居が建ち並び、またトイレにも不自由したことを思い出し、今回の旅を通じ、中国が今ほどのように発展したのかを知りたく思っていました。

そして上海の地を踏み、漢詩のふるさと江南の地を巡りましたが、一様に発展しており、特に上海灘地区の街並みの発展ぶりには驚きを禁じ得ませんでした。

道行く車は高級車ばかりで軽自動車などは走っていません。そして、豫園商城、靈隱寺、寒山寺等どこへ行つても、中国の人々で賑わっており、経済的にも豊かになり観光を楽しむ人が増えたように感じました。

蘇州滄浪詩社との交流

私は言葉が解りませんので不安に思っていました。が、焦社長が来てくださり、的確な通訳をして下さったことにより、楽しいひと時を過ごすことができました。

交流会では住田先生と滄浪詩社長の詩吟が披露されましたが、どちらも大変素晴らしかったです（交流会場への道中のバスの中で住田先生が吟じられた時は手を抜かれていたことが良く分かりました）。また、牛山先生が、大きな書道用紙に、すらすらとバランス良く揮毫されたことには深い感銘をうけました。これには後日談があります。自己紹介の席上で、私が第四十回北下浦牧水まつり短歌会で、横須賀市観光協会長賞を頂いたことをお話ししたら、帰国後に牛山先生が短歌を揮毫しプレゼントしてくださいました。我が家のミニ床の間に、主人が以前書いていただいた扇子と共に大事に飾らせていただいております。今回の旅行に参加した大切な記念品になりました。

台風による帰国延期

思いもよらぬ帰国便の欠航で、どうなるのかしらと不安を感



じましたが、ガイドの朱さんがご親切に宿の手配と翌日の航空更の変更もしてくださりホツとしました。皆さんはご自宅等に連絡をするのに大わらわのご様子でしたが、私は主人と一緒にいたからその点は安心でした。

ホテルは空港より車で十五分程度の場所とのことでしたが、ホテルの送迎がうまく機能しておらず、三十分以上待たされようやく出発したと思つたら、どこかを一回りして再び空港に戻つてきて、別のホテルの客を乗せて再出発となりました。こんな経験も中国旅行の醍醐味のひとつでしょうか。そのような事情で思つたよりも時間を要し、やつとのことでもホテルに到着しましたが、そこは今まで宿泊した外国人向けの高級ホテルとは異なり、現地の人達が利用するホテルでした。私は中国語が全く話せないため不安でしたが、古田先生と埴原さん達のお陰で、無事にチェックインすることができました。シャワー室のドアが壊れていて閉まりませんでした。設備の不備はどうであれ、ベッドで休むことが出来る幸せを感じました。

夕食は、皆様と隣接のレストランで済ませることとなりました。

古田先生・埴原さんにお任せして注文していただいたお料理の数々は、今までのレストランでいただいた少し油っこい中華料理とは異なり、胃にやさしく、大変美味しかったです。突然の飛



行機の欠航による、思いもよらぬ最後の晩餐は、不安も忘れ和氣藹々と楽しく過ごさせていただくことができました。

最後になりますが、住田先生、古田先生には大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。

また、山口団長を初め皆様には大変親切にいただき、とても楽しい旅が出来たことを感謝しています。皆さま、有難うございました。



網師園の夜花園にて

江南の旅の感想

武田一郎

「中国(江南)に行つてみたいねゝ行こうよ」と同期(九詩期会)のメンバーで話していたことが、メンバーの梅村さんや山口世話人代表の尽力で、江南(漢詩とグルメに関連した)史跡等を経巡る旅として実現することになり、期待一杯で参加させてもらった。

中国には約一〇年振りの訪問であつたが、訪問した上海が二三〇〇万人、蘇州が一〇〇万人と人も多く、浦東ゝ上海ゝ杭州ゝ蘇州ゝ上海ゝ浦東と走つた高速道には複数車線にたくさんの車が溢れていた。

以前に比べ街も道路も綺麗になり、又、活気は相変わらずで、最近の中国(共産党政権)の内部統制や外交政策を考え併せると、日本の行く末に一抹の脅威を感じたと云うのが一番の感想です。

旅行自体は、日中協会に頼んでもらつた影響か、旅行代金に比して素晴らしいホテルや食事で、凄くお得な旅行だったし、江南は春秋時代の呉と越の興亡の地だと遠い昔の中国への想いを馳せながら訪れた靈隠寺、西湖、滄浪亭、烏鎮・東柵、寒山寺、蘇州博物館等々や滄浪詩社との交歓や蘇州大学での呉先生の講義も十分愉しむことが出来た。

食事は食べきれない量の料理とビール・紹興酒が毎回で、胃腸には良くない旅行だったように思う。(正直、日本の味の方が僕には合うと云うのも感想です)

幹事役を務めてもらった人達への感謝と、今回の様な旅行の企画がまた実現すれば良いな。その時も出来れば参加したいなどの思いを感想とさせて頂きます。

愉重陽江南

重陽の江南を愉しむ

登秋詩友旅江南

登秋 詩友と江南を旅す

古寺名園処覃

古寺名園 処処に覃し

款待離亭筵有酒

款待離亭 筵に酒有り

卓囲欣喜樂歡談

卓を囲み欣喜として歡談を愉しむ

○登秋 実りの秋

○覃

あまねし

○款待 ご馳走

○筵 座席



江南の旅―団長亭日乗

山口幸雄

第一日(十月二十五日)

羽田空港―上海浦東空港―豫園(昼食)南翔饅頭店―魯迅紀念館―田子坊―錦江飯店(泊)―(夕食)悦来大酒店

上海へ 空港到着後、入国審査を終え荷物を引き摺りながら外へ出たときは、ちよつと心配だった。現地の旅行社のガイドさんがちゃんと迎えに来ているかどうか。一応わたしは今回の一行の代表ということになっているが、中国語ができるわけではないし、中国経験は前に一度、万里の長城を見に来たことがあるだけ。もし何かの手違いで行き違つて会えなかったら、相当の苦勞を背負い込まねばならない。どうかちゃんといてくれますように。

通路の外には迎えの人たちが大勢待ち受けていて、「〇〇会社様」とか「××一行」とか書いた紙を持つてかざしている人がたくさんいる。どこだどこだ。こういうときに「目を皿のようにして」というのだろう。わたしが真っ先に見つけた。左手の方に「神奈川県漢詩連盟13名様」と書いた紙を持った人。駆け寄つて「神奈川県漢詩連盟です」と名乗る。日本語が通じる。すぐ見つかつてよかった。ガイドは朱兵さんと言つた。南京大学で日本語を学んだそうで日本語がうまかつた。これであとはおまかせだ。

バスはハイガー(Higer 海格)という中国製二九人乗りのバス。運転手は



朱さん

王さん



王さんといい、運転がうまかった。

高速道路を上海市内へ向かう。道路は広い。車線もたくさんある。中心に近づくにつれて車が多くなる。やがて上海のランドマークになっている東方明珠塔や、それより高い六三二メートル

の上海中心大廈（上海センター）などの高層ビルが見えた。

バスを降りてから豫園商城まで行くのに、普通の住宅兼商店街のようなところを歩いて行かねばならなかった。中国では今、観光地でのバスの乗り降りが厳しく規制されており、離れたところの駐車場から歩かないといけないのだという。

この道の傍らの公園のフェンスにはずーっと布団が干してあったのには驚いた。中国では公園のフェンスは洗濯干しにつかってもいいものなのか？ このあたりは大都会の中の庶民の街であるらしい。よく使い込まれたバイクや自転車がたくさん並んでいる。高層ビル街の風景とはずいぶん差がある。上海の人口は二四〇〇万人。大きな街なのだ。



第二日（十月二十六日）

杭州靈隱寺―西湖（昼食）靈光菜館・浙江省博物館・西泠印社―河坊街（夕

食）皇飯児―浙江梅地亚賓館（泊）

杭州靈隱寺

靈隱寺の前の山は天竺の靈鷲山が飛来してきたものだという伝説がある。その昔、イ

ンドの慧理和尚がこの地に至り、そう言つて寺を建てた。だから山は飛来峰と呼ばれている。

飛来峰のふもとの溪谷の崖にたくさん石仏が彫つてある。五代十国の呉越時代から元の時代まで、約三四〇の磨崖仏があるという。

中でも有名なものが、巨腹の布袋像で、切符にも載っている。腹の大きな布袋さんは豊かさの象徴として中国で人気があるのかと思つていたら、これがなんと中国では弥勒菩薩なのだという。

それはないだろう。弥勒菩薩といえばぼつそりと女性的で、いかにも慈悲に満ちたやさしく尊いお姿というのが日本の常識である。広隆寺や中宮寺の弥勒菩薩像が有名だ。

しかし中国では本当にこれが弥勒なのである。その

証拠に、同じような布袋像の右足元の看板にはちゃんと「布袋弥勒」と書いてあった。

司馬遼太郎は、『街道をゆく19 中国・江南のみち』に書いている。

布袋というのは後梁(907～923)のころ実在の禅僧で、家をまわつて食を乞い、もらうと大きな布の袋に入れていた。そのため「布袋」と呼ばれた。腹が異様に大きく、常に半裸で、雪の中でもその



まま寝た。いわば異常人であつた。だからその死後、布袋は弥勒菩薩の化身だつたという伝説が生まれ、やがてそれが定着したのではないかと。

天王殿というお堂にかかる「雲林禪寺」の額は、清の康熙帝が書いたものだという。康熙帝はけっこうポップな書体を見て、ここの主仏が金ピカの弥勒菩薩Ⅱ布袋さんであるのを見ると、同じ仏教でもずいぶん違うと思わざるをえない。いくつもある建物もずいぶん大きくて色彩豊かである。中の仏像も大きくてカラフルな像がたくさんあつた。

さてここで自作の漢詩をひとつ。

訪杭州靈隱寺

杭州靈隱寺を訪ぬ

重陽溪谷水淙淙

重陽の溪谷 水は淙淙そうそう

石佛崖樹影濃

石仏崖いまに座して 樹影濃やかなり

咫尺西天靈隱寺

咫尺じせき西天 靈隱寺

慈尊巨腹自從容

慈尊巨腹にして 自ずから従容しゅうようたり

○淙淙 水がさらさらと流れてくだるさま ○咫尺 非常に近い距離 ○西天 西方浄土

○慈尊 弥勒菩薩

西湖を歩く 西湖の浙江博物館と西冷印社を見た後、バスまで帰るのが大変だつた。タクシーで戻

るつもりだったが、西冷印社前ではタクシーがつかまらない。空車が来ても止まってくれないのだ。それでまた博物館前まで歩いて戻った。ここならタクシー乗り場があるという。ところがタクシー乗り場だということには、まったく車が来ない。それらしい表示がないので、本当にここがタクシー乗り場なのか疑うくらい来ない。

何か他の方法はないのかと朱さんに話しても要領を得ない。バス亭があつて乗合バスは来るけれど、あのバスは行く先が違ふという。違つてもいいから、われわれのバスを呼んで乗り換えられる場所まで行こうと言っても、承知しない。こちらは道路のことも規制のこともわからないからそう強くも言えない。一行のイライラは募るばかりだった。

われわれは再度歩いてもなんとかなるが、高齢の両先生や足の悪い人は割増しでもなんでも払つて帰るしかない。管理員に頼み朱さんが話してようやく一台がうんと言ってくれた。三〇元で話がついたという。一元一七円として五一〇円だ。なんだそのくらいで話がつくならもつと早くやつてくれ。一台一〇〇元でもいいぞ。

しかし次の車が見つかるまでまたしばらく時間がかかった。今度は四〇元だった。そして最後にわたしが乗った車は五〇元になった。これは本当は四人しか乗れないところを、残っていた五人全員が



無理矢理乗ったから更なる割増しもやむをえない。それにしてもいったい正規料金はいくらだったんだろう。中国のタクシーシステムはよくわからない。

第三日(十月二十七日) 蘇州・滄浪亭で交流会―(昼食)新天倫之樂大酒店―蘇州大学で講演会―平江歴史街区―誠品書店―(夕食)李公堤・得月楼―パンパシフィック蘇州(泊)

上海蟹 交流会・講演会のことは報告書に書いた。ともかくつつがなく終了してよかった。

この日の夕食は上海蟹を食べるということで楽しみにしていた。ちょうど季節である。

金鶏湖の李公堤という所にある「得月楼」というレストランへ行った。新館だか別館だか、建物がいくつも並んでいるうちの一つに入った。得月楼は蘇州料理の有名店らしい。白身魚の料理とかいろ

いろあつた中で、印象深かったのはやっぱり蟹。

この大閘蟹、日本ではもっぱら上海蟹と呼ばれているが、蘇州の陽澄湖産の物が最高級で、今日のはそれだという。

紐は生きているうちにかけられるもので、蟹どうしが喧嘩をしないように、もう一つは蒸し上がった時に姿が崩れないようにするためだそうだ。

握りこぶしぐらいの小さな蟹だが、割当はひとり一匹。食べるのがなかなか難しい。裏からフンドシを開けて身やミソをほじくりながら食べるわけだが、もともと小さくて大きな肉はついていない。ちまちまとほじくって行く



しかない。

この席には、汪鳴峰^{おうめいほう}さんという蘇州在住の篆刻家が列席していた。京都の龍谷大学に留学経験があり、日本語がとても上手だった。本来なら汪さんが今日の交流会・講演会の通訳を務めてくれる筈だったのが、仕事の関係でできなくなった。それで夕食だけでもと焦社長が呼んだらしい。

その汪さんが殻のほずし方から身の取り方まで細かく食べ方を教えてくれた。しかしわたしはもとと魚を食べるのが下手で、うまくいかない。手間をかけたけれどだいぶ取り残しがあつた。

食べるのは面倒だけれど、味は悪くない。同行者の中からやつぱり松葉ガニの方がうまいよという声も聞こえたが、これは松葉やタラバとは別のもので比較はできない。微妙な味わいがあつて、中国人が夢中になるのもわかるような気がした。

さてその汪さんからは「今日中国」というグラフ雑誌のようなものをいただいた。表紙写真の右が汪さんで、左はその老師らしい。A3判の大きな雑誌で、一六頁と薄いけれど、ほとんど全頁が汪さんの作品の紹介だ。それだけの篆刻作家としての地位や実績があるということだろう。PR用のものであるのかもしれない。しかし汪

さんからは自分の作品や関連商品、著書売り込むような話はいつさい出なかった。

一行の中で篆刻を趣味とする長岡さんは、スマホで自分の作品を見せ、いろいろ話を聞いて、本場中国の専門家と話ができたうえ、明るる日には汪さんにわざわざホテルまで著書を届けていただい



たとても喜んでいた。

それなりの地位のある人が、海の物とも山の物ともつかない今回の交流会のために一度は通訳を引き受けてくださり、またわざわざやってきて、蟹の食べ方まで教えてくださった。本当に日本が好きなのだと思います。ありがとうございました。

第四日（十月二十八日） 烏鎮雅園―烏鎮東柵（昼食）―寒山寺―蘇州シルク博物館―夕食（蘇州大学東呉飯店―網師園の夜花園―パン・パシフィック蘇州（泊）

住田先生の帰国 住田先生は朝早くホテルを出発して上海から一日早く帰国された。最初は明日は湯島聖堂の詩吟教室で指導をされる日なので、ツアーには参加できないという話だった。それを後から、一日早く帰るけれど参加すると言ってくれたのだ。

先生に参加していただいたおかげで交流会も安心して話を進めることができた。講演会の教室でも新作の漢詩を披露していただいた。おまけに毎夜、ホテルの先生の部屋でウイスキーをぐ馳走になりながらいろんな話を聞かせていただいた。本当に忙しいところをありがとうございました。

烏鎮雅園 うちんがえん このあたりの水郷古鎮の一つで観光地として有名な烏鎮（行く前に、「烏鎮雅園」という老人施設を見学に行った。

漢詩ツアーがどうして老人施設へ行くのか？

交流相手の団体をさがしてもらったとき、最初に出てきたのが老人クラブや老人大学の漢詩愛好会という話だった。それはいい。われわれのサークルも高齢者集団だし、漢詩のレベルも、そういう趣味の会であればトップクラスということはないだろう。九詩期会でもなんとか話ができるのではないか。杭州の老人大学と茶社でお茶を飲みながら交流という話も出て、期待していたのだが話はまとまらず、最後まで残ったのがこの烏鎮雅園の老人大学との話だった。

ではこの烏鎮雅園というのはどういう施設か。

インターネットを見ると、経済産業省関係の「上海介護拠点促進プロジェクト」の調査報告に少し記載があった。このプロジェクトは介護施設などのハードと介護サービスのソフトを中国に売り込もうという計画で、中国の民間資本が展開している事例として烏鎮雅園（烏鎮グレースランド）が調査されていた。

「烏鎮グレースランドは、元気で健康的な生活を送りたい退職高齢者層のため、景観に優れた環境と豊富なレジャー・健康施設を提供している。総合ヘルスケア養老パークは高齢者利用を中心に考えた計画で、機能的なデザインと懐かしさを有機的に統合したサービス施設であり、「養生養老、健康と医療、レジャー・リゾート」を三つのテーマとしている。敷地は、養生住宅、老人大学、養老模範区、医療公園、特色商業区、リゾートホテル」の6つのゾーンからなっている。



る。〕

壮大な計画で、稼働しているのはまだその一部で建設工事が進行中だった。完成模型を見ながらわれわれも説明を受けた。

日本の感覚の老人福祉施設ではなく、中国の民間資本による、退職高齢者が安穩に余生を過ごすための街づくりである。かなり恵まれた層を対象としているように見受けられた。居住区は別荘タイプ、高層集合住宅、低層集合住宅など様々なタイプがあった。

集合住宅のモデルルームも見て来た。前記の調査報告では、マンションタイプで七五²mが一二五万元(円換算二、一二五万円)、九五²mが一七〇万元(二、八九〇万円)ぐらいということだ。

老人大学というのはカルチャースクールのようなもので、活動カレンダーを見ると、茶芸社、唱歌、太極拳、瑜伽、花鳥画などなど多彩な部活動がある。京劇倶楽部もある。撮影倶楽部は写真部だろう。交誼舞活動というのは社交ダンスだろうか。ここの漢詩愛好会と交流会という話をしてもらっていたのだが、そういう部はなく、詩朗誦活動というのが対象になっていたのだろうか。

最終的にこことは日程が折り合わず、交流はダメになったけど、施設の見学だけさせてくださいということにして訪問したものだ。

ちょうどこの日、一〇月二八日は旧暦の九月九日で重陽節にあたり、その催し物が行われてい



た。現代の中国では重陽節は「敬老の日」(老人節)としているそう
だ。「節日的歓笑 雅園的味道／第三屆・重陽百寿宴／活動現
場」という看板が出ていた。窓の外からのぞかせてもらうと、体育館
のような広いところがバーティ会場になっている。会費は一人一〇元
で、みんな自作の料理などを持ち込んでやるらしい。そういえば途
中、鍋を抱えてやつてくる人たちを何人も見た。

以上が烏鎮雅園訪問記であるが、この訪問は一行から評判が悪
かった。なんで観光地でもなければ漢詩とも関係がない、こんなとこ
ろへ来たのか、というわけだ。

これは団長たるわたしの責任である。最終的にここを日程に組み込んだのはわたしの判断で、こ
んなことを考えていた。

第一に、最初に交流を考えた老人大学がどういうものなのか見ておきたかった。わたしが参加し
ないとしても、ひよっとして二度目のツアーがあるとすれば、老人大学が交流相手になるものかど
うか確認しておきたかった。

第二に「重陽節」の行事を見たかった。このツアーの日程は、一〇月二八日が重陽節であること
で決まった。漢詩には「登高」という、山に登る行事のことがよく出てくる。重陽節に行けば何か
見るべき行事があるのではないか。お祭りのようなことをやっているのではないか。そう考えた。



ところが探してもらっても、わたしの考えるような行事は見つからない。しかし、この施設では何かやるという話だった。だからきくと菊の花でもいいっぱい飾った敬老のお祝いか何かあるのではと期待した。せつかくこの時期を選んだのだから、何か重陽節にちなんだ行事を見たい。

第三に、当時話題になっていたテレビドラマ「やすらぎの郷」の影響もあって、老人施設に興味があった。それに観光地でないところへ行くことは、ツアーの特色にもなるのではないか。

理由としては以上のようなところだったが、事前に参加者に十分な説明はしていなかった。結果としても、残念ながら期待ははずれた。

訪問日が土曜日で老人大学は休業のため活動状況は見られなかったし、要するにカルチャー教室なので、団体同士の交流とはならなそうなのがはっきりした。

重陽節の行事は上記のとおりで、伝統行事とは遠かった。菊の花もなかった。

一行の中で老人施設に興味のある人はごくわずかだった。

これでは時間の無駄と感じた人が多かったのも無理はない。団長として深く反省しております

第五日(十月二十九日) 蘇州博物館―刺繡研究所―(昼食)―上海浦東空港・飛行機欠航―藍舎快捷

酒店(泊)―(夕食)藍舎鮮活工場

飛行機欠航 午後三時頃、バスで上海浦東空港に着くと、帰国予定の中国東方航空MU五七五便は台風二二号のため、なんと欠航になっていた。ちよつと衝撃だった。

ガイドの朱さんが飛行機を確認してくれた。明朝七・三〇発のMU五七五A便に、受付カウンターのバスポートを提示すれば乗れるという。振替輸送ということか。他の航空会社も日本行きは飛ばないし、飛行機はそれかしきょうがない。

しかし今夜の泊まりはどうする？ 朱さんがさつきからなにやらやりあっていた黒いスーツの青年は、なんとホテルの営業マンだという。欠航のニュースと共に空港へやって来て、あぶれた団体客を見つけてはホテルを斡旋しているらしい。「生き馬の目を抜く」という言葉を思い出した。人の不幸はビジネスチャンス、というわけか。

朱さんが言うには、泊まりは一室二六八元。一室一人も二人も同じ。空港から車で十分くらい、ホテルのバスで送る。明日の朝も五時発で空港まで送る。浦東空港内にもホテルはあるが、平時でも満員で、今からではなかなかとれないだろう、という。

ここは決断しなければならぬ。

二六八元は一元〓一七円で四、五五六円。ここまで泊まってきたホテルの半額以下。安ホテルである。しかし他のホテルを探してうろうろしてもどうなるかはわからない。一行の皆さんには、どうせ明日朝早いから泊まれさえすればいいから行ってしましようかと承諾を得て、ホテルの車を待った。ところがホテルの車がなかなか来ない。黒スーツの青年もいなくなった。朱さんは、バスのそばで運転手の王さんと所在なげにしている。一仕事終えて、あとは二人で蘇州へ帰るだけなのに、なかなか帰れなくてちよつと不満というところ。

やがてマイクロバスがやってきたが、なんと先客が二人乗っていた。われわれ専用で特別に迎えに来てくれるのだと思いついていたら、そうではなかった。飛行機の欠航で悲惨な被害者ムードでいたけれど、そんなことまわりの人々には関係なく、ホテルもバスも通常営業中なのだった。

朱さんとも王さんともここでお別れ。二五日に上海に着いて以来ずっとお世話になった。ありがとう。しかしこれで明日までガイドなしになる。ちよつと不安である。

一五分以上かかってホテルへ到着。誰かが「アメリカのモーターのようなどころだ」と言った。ホテル名は「藍舎快捷酒店」。英語で「BLUE HOUSE」とも書いてある。日が暮れると青いライトがついて、なるほどブルー・ハウスだ。

小さなホテルで玄関を入るとすぐ左がフロントになっている。田舎の小旅館という感じだ。若い男の職員とは英語の片言でなんとか話が通じるが、女の職員は中国語しか通じない。おまけに国際電話が通じないという。自宅への連絡は、空港で平賀さんのスマホを借りて一報だけ入れておいたが、あとはホテルからしようと思っていた。それができない。

部屋は一間に小さな洗面所とトイレ・シャワー室というつくり。わたしの部屋の外はすぐ駐車場だ。前日までは一流ホテルだから、いかにも安普請で通路の音もよく聞こえるのが気になる。まあ明日の朝までしのげればいいし、中国の庶民の泊まるホテルを見学できたと思えばいい。



ホテルの前の通りは、車通りは多いがさびしくて店や家の灯りもまばらだったので、隣にあった、ホテルが経営している「藍舎鮮活工場」というレストランへ入った。

面白かったのは、料理を食べ終えて勘定をしたときのこと。

メニューに一覧表から四品を選択する九八元のコースがあった。そこで中国語のできる古田先生と植原さんにごんばつて四品を決めてもらい注文した。そして飲み物や追加料理も含めて無事料理は食べ終えた。だから一人百数十元の支払いになるはずだ。

ところが勘定を払うと、全部まとめて四四九元。円換算で約七千六百円、すごぶる安い。一人六三〇円ぐらいだ。こちらは一人百元以上、二千数百円ぐらいのつもりだったから、キツネにつままれたよう。安いのはうれしいけれど、本当にいいのか？

レシートを詳しく見ると、四品コースを二人前ではなく、単品を四つ注文しただけになっている。横浜の中華街でも単品一つ頼むと三人分くらいある。だから単品四つを二人で食べて、それほど不思議にも思わなかったのだろう。もつとも追加で他の料理を何品か頼んではいる。ともかくこれでいいらしい。みんなで大笑いして納得した。料理もおいしかった。

中国の一般庶民はこれくらいの料金で食べているのかもしれない。ビールもここまで一番高いところでは一本二〇元したのに、ここはなんと一本五元だった。銘柄は哈爾濱(ハルビン)ビールだった。飛行機は欠航したが、ここでも無事楽しく一夜を過ごすことができた。

第六日(十月三十日) 上海浦東空港―羽田空港

リチウム電池 朝五時ホテル発のバスで空港に着き、あとは出国手続きをして飛行機に乗ってしまった。え、というところで、ちよとした波乱があった。一行の一人が手荷物検査で引っかかって別室へ連れて行かれたのだ。わたしは先に手荷物検査をすませ出国審査を待つ列にいた。もし順番までに来なかったらどうしよう。わたしにできることといつてないけれど、ともかくこちら側で待っていないといけないだろうか。飛行機の時間はどうか。

そんなことを考えているうち、行列の彼方に小さく姿が見えた。来た、来た！ みんなで手を振って招き、われわれの列の中入ってもらった。

なんと原因はカメラの予備のリチウム電池だという。もう使わないからとスーツケースに入れておいたら、それがひっかかって、別室で検査されて大変だったようだ。

カメラ用のリチウム電池ならわたしも持っていた。4センチ角くらいの小さなやつを手荷物のバッグに入れていたがセーフだった。ところが同じものをスーツケースに入れていたら、これは何だ！ と別室へ連れて行かれてスーツケース内全品洗いざらい検査になったということだ。わけがわからない。

帰ってから調べてみると、リチウム電池は発熱・爆発の危険がある。それはと

きどき聞く。だけど手荷物内なら発熱してもすぐ気がつくからOKで、スーツケースに入れて荷物庫の奥深くで発熱・爆発を起こすと大惨事につながる恐れがあるからダメ



という理屈らしい。

わかつたようで、いまいちストンと落ちないが、そうなっているなら今後は十分気をつけないといけない。酒などの液体は逆に、手荷物はダメでスーツケースならOKだからこんがらがつてくる。

ともかくその場はみんなで、無事済んでよかったねと出国審査を終え、一時間遅れの飛行機に全員搭乗して元気で帰国したのであった。めでたし、めでたし。

旅を終えて

四泊五日が五泊六日になったものの、ツアーは無事終了しました。

滄浪詩社、蘇州大学の皆さん、ガイドの朱兵さん、運転手の王さん、メディア新日中の焦社長、深山さん、日中協会との橋渡しをしていただいた梅村さん、この催しを応援いただいた神奈川県漢詩連盟の皆さん、本当にお世話になりました。厚くお礼申し上げます。

そして、住田先生、古田先生をはじめ、海のものとも山のものともつかなかったこの試みにご参加くださったみなさん、本当にありがとうございます。不手際に加えて、思わぬこともいろいろありました。みなさんのご協力のおかげで楽しい旅ができました。深く感謝いたします。

トリップフォトアルバム・三 江南
長岡容子

